

近代日本発展の基礎を伝えよう② 人物を作った徳川時代の教育

全国日本語学校連合会主席研究委員 佐伯浩明

◆今も立派に通用する五倫・五常の教え

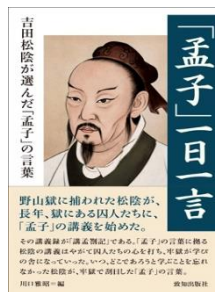
前回は、東洋思想の大家・安岡正篤先生が「家康は講学の自由を宣言した。家康は儒教にこだわらず、儒教も仏教も自由に採用した。学派もこだわらず家康の『講義学問の自由』の種が生きて花開くのは徳川時代後期を待たねばならない」と書いていたことを紹介したが、江戸時代を通して一番盛んだったのは、何といても儒学である。徳川家康に代表される江戸幕府は、幕政下の日本を安定的に保つには、儒学などの道徳的体系的な学問が必要だと考え、武士に儒学を学ばせ、庶民にも広めた。

それは、人として生きていく上に必要な道徳律の確立だった。清明を尊び穏やかな性質の日本人には受け入れやすく合っていたのだろう。全国に広まった。その教えは、基本的には「五倫・五常の教え」である。すなわち人間関係を規律する五つの徳目であり、孟子が『孟子』滕文公（とうぶんこう）上篇で「孝悌」を基軸に道徳律として「五倫」の実践を主張した。「父子有親」「君臣有義」「夫婦有別」「長幼有序」「朋友有信」の5つ。親・義・別・序・信である。

「五常」は人間として生きていく上で必要な5つの徳目をさしている。仁（慈愛）・義（人として守るべき正しい道）・礼（人として守るべき規範）・智（智慧、是非善悪の判断力、真理を求める心）・信（信用・信賴、誠実）の五つ。孔子・孟子の教えを受けて、前漢^{とうちゅうじよ}の儒学者・董仲舒がまとめたと言われている。



董仲舒肖像



『「孟子」一日一言』致知出版社

こうした教えは、藩校、郷校、塾、寺子屋などを通して庶民に至るまで浸透していった。幕末の江戸時代の日本を訪れた外国人は、その明るく清潔好きな国

民性と共に、日本人が決して「嘘をつかないこと」「約束を守ること」、その誠実さに一様に驚いている。明治政府は、外債を募って国の近代化を成功させたが、諸外国が日本に資金を出した一因には「貸した金は必ず期限までに返した」ことや「公約した約束を必ず守る」、あるいは「勤勉さ」などが挙げられるだろう。海外の訪問者は、日本人の「正直さ」も特筆している。

◆昌平坂学問所と花開いた江戸の学問

江戸の学問だが、土農工商の位階秩序を重んじた江戸幕府は、儒学の朱子学を専らとした。徳川幕府の有名な昌平坂学問所は、1630年（寛永7年）3代將軍徳川家光の時代に、儒学者の林羅山が幕府から上野忍岡うえのしのぶがおかに屋敷を賜り、孔子を祀り私塾「弘文館」を開いたことに始まる。文治政治を推進した5代將軍の徳川綱吉は、1690年（元禄3年）、上野忍岡から孔子廟を神田湯島への移築を命じて「湯島聖堂」とし、講堂・学寮も整備した。孔子の生地、山東半島は曲阜の「昌平郷」にちなんで「昌平齋」または「昌平坂聖堂」とも呼んだ。運営は代々大学頭だいがくのかみの林家当主が継承した。



(江戸時代の湯島聖堂と境内に建つ孔子銅像)

しかし、1790年（寛政2年）、「寛政異学の禁」により幕府の教学政策として朱子学が奨励され「学問所」を林家から切り離れた。こうして1797年までに整備を進めて幕府教学機関としての「昌平坂学問所」とした。この時、儒学者の尾藤二洲・古賀精里らが教授として招かれ、以後は徳川幕府の直参旗本のみならず藩士・郷士・浪人の聴講入門も許可するなど幅広く武士が利用できるようになった。今はお茶の水の聖橋の東たもと袂に孔子らの賢人を祀る大成殿などの廟が残り「湯島聖堂」の名で親しまれている。

孔子の言葉を綴った『論語』に「子曰わく、憤ふんせざれば啓けいせず。悱ひせざれば発せず。一隅を挙ぐるに、三隅を以て反さざれば、則ち復たふたびせざるなり」（論語・述而篇）という一節がある。「啓発」の語の出典と言われている。意味は次のようである。

「孔子先生が言われた。私は、学問に対して、ふるい立つほどの情熱をもたない者には、教え導くことはしない。また、解っていないながら、それを口にうまく言えず悶えるほど積極性を示さない者にも、教えることはしない。四角の一隅について教えた場合、それを基にして、更に自分なりに工夫して他の三つの隅について考え、自分から答えようとしなない様では、教えはしない」

教育とは、先生が知識やものの見方を教え、学生の潜在的能力に気づかせて眼を啓かせることだが、同時にこの一節は学生の自己啓発、自らを磨くために学ぼうとする熱い心、努力する姿勢も大事だと言っている。孔子は「自らも発憤し、弟子たちも発憤せしめた」と言われている。「儒教の祖」といわれる孔子は名教師だったことがよくわかる。中国以上に江戸時代の日本人は、孔子に魅かれたようだ。

こうして、家康から綱吉に至り後代の吉宗も含め歴代徳川家の学問への関心の深さと儒学を重んじる姿勢は、広く社会に影響を与えた。後に伊藤仁斎、山鹿素行、新井白石・荻生徂徠・雨森芳洲・広瀬淡窓らの多くの儒学者、教育者を輩出した。儒教の教えは、様々な形で学問の道を開き、本家の中国よりも日本において良い形で花開いた観が深い。

一方、徳川幕府は西洋の学問や宗教に学ぶことを禁止した。これは、バテレン（キリスト教）に帰依した指導者らが、神社や仏閣の破壊行為に出たのが原因の一つだった。しかし、当然のことながら日本の古典や歴史を学ぶことは認めていた。『万葉集』や『源氏物語』などの古典文学を読むことも、『古事記』『日本書紀』などの歴史を学んだりする学者も現れた。

◆「古学」の誕生と「古学の祖」山鹿素行

江戸時代前期の軍学者・兵法家として有名な山鹿素行は、歌舞伎になった『忠臣蔵』で有名な播州赤穂浪士の吉良邸討ち入り事件の山鹿流陣太鼓に、その名をかすかにとどめているが、大石良雄以下、赤穂浪士の討ち入りは、生前の素行が教えた軍学通りに実行されたという。素行は万巻の書を読み神儒仏に通じた傑出した人物であった。多くの大名、藩士、浪人が浅草は田原町の素行の私塾『積徳堂』で学ぶなど尊敬を集めた。このため儒者仲間からは嫉妬され、幕府からは畏怖される存在だったようだ。



山鹿素行肖像画

素行は『聖教要録』を著わし、同じ儒教でも、宋明時代の朱子学を否定し、古代の「周・孔の時代に帰れ」「周・孔の聖人の道に学べ」と説いたため、幕府の

お咎めを受け赤穂に流された。しかし、その赤穂時代に『日本書紀』を読み込んで名著『中朝事実』を著わした。そこで素行は、世の中、あげて「支那は素晴らしい」と賛美一色だった時代に、『日本書紀』を読み解いて、日本の文化、歴史、伝統の素晴らしさを説いたところが新しかった。新鮮だったのである。

単なる武術・兵学だけでなく、日本の国柄と道徳を重視し、武士道を確立したため「古学の祖」「武士道の祖」といわれるほどの人物となった。伊藤仁斎の「古義学」、荻生徂徠の「古文辞学」なども含んで、江戸時代の学問の世界では「古学」は1つの大きな勢力を形成した。残念ながら山鹿素行については、現代においてはまったくと言って良いほど忘れられた存在となってしまっている。素行先生については、決して忘れてはならぬ人物として稿を改めたい。

◆江戸の識者を目覚めさせた国学の勃興

一方「和学」の流れを受け継ぐ「国学」の誕生が、儒学全盛の時代に勃興したところが歴史の面白いところである。それは、江戸時代は初期、4代将軍の徳川家綱の時代に、水戸徳川家の徳川光圀公の志に端を発する。光圀公がまだ世子の青年時代の1645年（正保2年）、中国の古典『史記』「伯夷伝」を読み「不義の粟は食わず」と餓死を選び「清節」を保った伯夷・叔齊兄弟の話に感銘を受け、以来、反省して学問に精励し、世の中、「支那一辺倒」だったにもかかわらず、日本建国の史書編纂を志したところが傑出している。

光圀は世子時代の1657年（明暦3年）明暦の大火で、小石川藩邸が焼失して駒込別邸へ移った時に史局を設け『大日本史』編さん事業を開始した。この時、光圀の命により、真言僧の契沖が万葉集を研究し、儒教や仏教の考えに捉われない立場で、『万葉代匠記』を残し、日本古来の古典や文化の研究の基礎を作った。これが「国学」への発展をうながした。

とくに契沖は、和泉国和泉郡久井村（和泉市久井町）の辻森吉行方や、同郡万町村（和泉市万町）の伏屋重賢のもとで、仏典、漢籍や日本の古典を数多く読んだ。晩年の1679年（延宝7年）に妙法寺住持となり、亡くなるまで古典の研究に励み、『万葉集』の正しい解釈を求めた。当時主流だった「定家仮名遣」の矛盾に気づき、歴史的に正しい仮名遣いの類例を『万葉集』、『日本書紀』、『古事記』、『源氏物語』などから拾い分類し『和字正濫抄』を著した。これに準拠した表記法は「契沖仮名遣」と呼ばれ、のちの歴史的仮名遣の成立に影響を与えた。

しかし、「国学」という言葉が使われるようになったのは、契沖の後の荷田春満の頃だ。荷田春満は契沖の『万葉代匠記』を学び、日本と言う国を意識して古典や国史を学び古道の解明を試みた。さらに『万葉集』『古事記』『日本書紀』や大嘗会の研究の基礎を築き、復古神道を提唱するなどの業績を残したことで知られる。江戸の神田明神の社家の家に国学講習所を開き講義している。神社境内の社殿わきに、作家・今東光の筆になる「国学発祥の碑」が建っている。

ちなみに大阪府和泉市の立石尾中学校正門前（万町）にも、契沖の業績を讃えて「国学発祥之地」の立派な石碑が建っている。こちらの碑は、「国学の始祖」とも言われる契沖が、和泉滞在にちなんで建てられたものである。

「国学」は「和学」「皇朝学」の流れを引き継ぎ「古学（古道学）」ともいわれ、研究分野は、国語学、国文学、歌道、史学、地理学、有職故実、神道学と幅広い。儒教や仏教の考えに捉われない立場で、日本古来の古典や文化の研究を目指す学問であり、荷田春満、賀茂真淵その弟子、本居宣長、そして平田篤胤が「国学の四大人（しうし）」として有名だ。

このうち賀茂真淵は、人為的な君臣の関係を重視する朱子学の道徳を否定し、「日本の古典にみられ、古代日本人の精神性の純粹な表れとされる、作為のない自然の心情・態度こそ人間本来のあるべき姿である」として、古道説を確立した。儒教道徳、仏教道徳などが人間らしい感情を押し殺すことを批判し、万葉集の歌に歌われているような人間のありのままの感情の自然な表現を評価した。



本居宣長肖像画

本居宣長は国学の巨人である。賀茂真淵から「松坂の一夜」の教えを受け、『万葉集』を解説、『源氏物語』の本質を「もののあはれ」と読み解いた。やがて『古事記』の注釈に挑戦し、35年かけて注釈本の『古事記伝』を完成させた。国学の発展をもたらした多くの優れた弟子を生んだ。宣長は「『もののあはれをしる』ことは同時に人の心を知ることであると説き、人間の心への深い洞察力を求め、『もののあはれをしる』心そのものに美を見出した」と言われている。

◆日本を近代化に導いた洋学

国学の一方で発達したのが「洋学」だった。江戸時代の「洋学」は、幕府の鎖国政策で西洋との接触はオランダに限られていたため、当初は「蘭学」だった。だが、実態はヨーロッパの学術・文化・技術の習得であり、幕末の開国後は、他の欧米諸国とも交流が広がり「洋学」となった。江戸時代の初期は「蛮学」（「南蛮学」の意）、中期は「蘭学」、後期を「洋学」という名称が多く使われた。

「蘭学」の発祥は長崎である。人々はオランダ語を通詞（通訳）を通じて学び、西洋文化を摂取した。だが幕末は1858年（安政5年）に「英語伝習所」ができ、1863年（文久3年）に「洋学所」次に「語学所」となり、英・蘭・仏・露・清の諸国語および西洋数学を授け、明治維新前後に活躍する人物を多数生んだ。



徳川吉宗肖像画

「洋楽」の先駆者の一人は、肥前国長崎生まれの天文・暦学者の西川如見である。長崎で見聞したアジアなど海外通商事情を記述した『華夷通商考』を著した。西川如見は天文・暦算を長崎出身の暦算家・小林義信に学び、中国の天文学説を基に、ヨーロッパ天文学説にも理解を深め、八代将軍徳川吉宗の下間を受けたが、吉宗は洋書の禁を緩めたことでも知られる。また、吉宗は、後に「甘藷先生」として有名になり幕府の書物奉行を勤めた青木昆陽や伊勢の国出身の本草学者・野呂玄丈に蘭語習得を命じ、青木は「和蘭（オランダ）文訳」「和蘭文字略考」といった蘭語の辞書や入門書を残し、野呂はヨハネス・ヨNSTONやレンベルト・ドドエンスの図鑑の抄訳を著した。この二人も共に「蘭学の先駆者」と呼ばれ、杉田玄白の『蘭学事始』に二人の功績が記されている。江戸時代後期の1833年（天保4年）に蘭和辞書『ドゥーフ・ハルマ』が完成している。『解体新書』で知られる前野良沢は青木昆陽の弟子にあたる。

一方、蘭学興隆に伴い、幕府は初代天文方の高橋至時の子の高橋景保の建議を容れ、1811年（文化8年）に天文方に「蛮書和解御用」を設けて洋書翻訳をさせた。1823年（文政6年）にはシーボルトが日本を訪れ、長崎の郊外に「鳴滝塾」を開いて高野長英や小関三英などの門下生を教えたが、日本国地図の海外持ちだしに端を発する「蛮社の獄」の弾圧事件が起きた。長英は、江戸幕府の異国船打払令を批判し開国を説くが、弾圧を受け脱獄し逃亡生活の末に捕縛され護送中に絶命した。長英は幕府の鎖国政策を批判した『^{ぼじゅつ}戊戌夢物語』などの著作を残した。

幕末には日本も開国に向い、英・仏・独など西洋各国の学問が広まり、「洋学」は発展していった。高島秋帆の西洋砲術、江川太郎左衛門の葦山反射炉、佐久間象山の大砲鑄造、幕臣の永井尚志・木村芥舟（木村摂津守喜毅）の「長崎海軍伝習所」、勝海舟の「神戸海軍操練所」などが次々に生まれ、幕府は軍事でも「洋学」の技術の高さを重視したため、軍事研究と技術開発が進み、多くの藩で軍事技術の開発、軍事教練の洋式化が進んだ。

嘉永年間（1848年～1855年）から幕末にかけて「洋学」は語学・医学・天文学・物理学・測地学・化学と多岐に渡って発展し、『蘭学事始』を刊行し、英語も学んだ福澤諭吉や中浜万次郎から英語を学び多方面で活躍した幕臣の大鳥圭介、日本赤十字社を興した佐野常民などの系譜に受け継がれた。「種痘所」を開設した伊東玄朴や山脇東洋が江戸時代中期の1754年（宝暦4年）に記した『蔵志』などは後の医学に多大な影響を与えた。また、司馬江漢らが長崎を通じても

たらされた西洋の油絵や銅版画を模写しながら遠近法や陰影法を独習し、日本の洋風画の先駆的な存在となった。

江戸時代末期に「医学」は発展した。肥前蘭方医で、長崎でシーボルトに学んだ伊東玄朴は幕府の奥医師となった人だが、1826年（文政9年）蘭学塾「象先堂」を開き、1858年（安政5年）お玉ヶ池に「種痘所」を建てた。これが1861年（文久元年）に幕府が設けた「西洋医学所」の源流である。一方、大阪では緒方洪庵の「適々斎塾」（適塾）がとくに有名だ。「西洋医学所」は1863年（文久3年）に「医学所」と改称され、緒方洪庵、松本良順らが次々に頭取となって整備され、西洋医学の最高機関として幕末に至っている。明治維新後に「開成所」とともに東大創設の母体となったのである。